

2020年度 タカラ・ハーモニストファンド 助成先 一覧

	助成先 代表者名	助成額 活動地域	テーマ 活動・研究の内容、目的、助成金の用途等
活動 の 部	NPO法人 裏磐梯エコツーリズム協会 会長 眞野 眞理子	35.2万円 福島県	裏磐梯の湖沼や森林を守れ！外来種を学んで駆除しよう！ 磐梯朝日国立公園内に位置する磐梯山周辺の森林や湖沼の豊かな自然を次世代に守り伝えるために、生態系に被害を及ぼす恐れのある外来種を、地域の方々をはじめとする多くの人々に知ってもらい、そのうえで、良好な自然環境の保全及び創出のためにできるだけ駆除することを目的とする。具体的には、132年前の噴火で特殊な環境にあり、生物多様性の保全上重要な地域である裏磐梯地区で大繁殖し問題となっている、環境省が我が国の生態系に被害を及ぼす恐れのある外来種リストに示す緊急対策外来種オオハンゴンソウ・ウチダザリガニ、重点対策外来種コカナダモ、総合対策外来種コウリンタンポポを防除のため駆除作業を行うことを目的とする。
	NPO法人 富山県自然保護協会 理事長 川田 邦夫	37万円 富山県	立山山麓家族旅行村ミズバショウ自生地保全整備活動 富山県自然保護協会は、杉林の林床に長年雑木に覆われている湿原の調査を行ってきた。その結果、雑木の下にはミズバショウの思いがけない広範囲の広がり、湿原特有の植生(アケボノシュスラン・ミズオトギリ・ショウジョウバカマ/他)や林内の沼に生息する貴重な水生動物(モリアオガエル・ヒメボタル・他)などが観察された。長年の放置のため既に湿原は乾燥化し荒れ地に向かっており、上記の貴重な動植物は損なわれつつある。そこで、雑木の刈り払い、水流の整備などを通して乾燥化を防止し、ミズバショウや湿生植物、また池沼に住む生物などの生育環境を守っていく。湿原を保全整備しながら身近にある美しい自然を未来へ引継いでいきたい。
	南丹たんぼ組 代表 星野 隆護	17.8万円 京都府	正ヶ谷に蜚を呼び戻そう！ 正ヶ谷にある木原区唯一の昔ながらのいびつな形の棚田や水路、周囲の山の環境を一体的に整備し、正ヶ谷の環境保全に取り組む。 【棚田】整備：自然栽培で水田として活用し、蜚が舞う棚田を目指す。数十年前には飛んでいたらしい。谷にある耕作放棄棚田も新たに借りて山裾に防獣策を設置し、放棄地ゼロで獣害対策を強化する。※放棄棚田利用は地主の承諾済み。猪と鹿の被害は、南丹市内でも特に酷い地区である。 【山】整備：薪熱(倒木や枯れた木の枝)を使って食事会を行う。薪ストーブや木の枝が燃料のロケットストーブを使い、その木の枝を周囲の山で集めたり、倒木を薪に使うことで、荒れている山の環境整備活動につなげる。
	NPO法人 自然回復を試みる会・ビオトープ孟子 理事長 北原 敏秀	47万円 和歌山県	未来遺産登録地 海南市孟子不動谷水辺ビオトープ整備事業 1998年発足以来、海南市孟子不動谷における耕作放棄地の増加による稲作水系の劣化を防止するために湿地環境を創生する目的で掘削管理してきた水辺ビオトープには、セトウチサンショウウオ(和歌山県RDB絶滅危惧Ⅱ類)、ニホンアカガエル(和歌山県RDB絶滅危惧Ⅰ類)、ベニイトンボ(和歌山県RDB準絶滅危惧種)に代表される多くの湿地性希少生物が生息していますが、近年移入動物であるイノシシの害により保水力が著しく低下しています。当助成金により、水辺ビオトープの改修を行うことで、保水力を回復し、多くの湿地性生物が安定して生息できる湿地環境の復元を行うとともに、湿地性生物のモニタリングを行います。
	旭の自然を守る会 会長 石原 隆志	21.4万円 岡山県	冊子シリーズ「旭の里山・生きもの写真集」作成事業 2013年から休耕田に通年水を溜め、適度な管理を行った田んぼビオトープを作っています。また、周辺の雑木林や草はらの管理も行っています。今では希少種・絶滅危惧種を含め多くの動植物が見られるようになり、毎年観察会も行っています。2018年には環境省の「モニタリングサイト1000・里地調査」の一般サイトに登録され、動植物の調査・報告を行っています。適切な管理を行うことによって生物多様性と里山景観が保全されます。そして、環境教育の場として、また地域の人々が集う場としても生きてくると考えます。協力して楽しみながらそのような場を作っていく。それが私たちの活動の目的です。
	山口大学教育学部附属 山口小学校 小林 弘典	50万円 山口県	上流から下流にいたる榎野川水系の生物調査と水質調査 活動の具体は、小学校第3学年児童35名による底生生物の調査と化学的な水質調査、また、そこに生息する遊泳生物(魚類)等についての調査である。活動目的は、本活動を通して地域の川の豊かさを知り、将来にわたって郷土の自然を大切に、環境保全に取り組もうとする心情を養うことである。単元の中で、魚捕りや水質調査、専門家から話を聞くなど、多面的に地域の川やそこに棲む生き物にかかわることを大切にしたい。そうすることで、地域の川やそこに棲む生き物に対する見方を変容させていくことができると考えるからである。なお、今年度は、採集地点や調査地点を増やし榎野川の生物相や水質について明らかにしていきたい。
	西表石垣国立公園 パークボランティア連絡会 代表 太田 久雄	50万円 沖縄県	パークボランティア連絡会の活動増進作戦 日本の最南端に位置する西表石垣国立公園は極めて豊かで特徴的な自然環境を有している。しかしながら、近年では特定外来生物の侵入による環境の攪乱や、交通量の増加によるイリオモテヤマネコなどのロードキルが大きな問題になっている。パークボランティアは外来種の駆除作業やロードキルを減少させるために道路沿いの草刈り作業を定期的に続けている。また、観光客、地域住民に自然解説や公園の適正利用指導も行っているが、これらの諸活動の回数を増やしさらに活動を活性化させる。

	助成先 代表者名	助成額 活動地域	テーマ 活動・研究の内容、目的、助成金の用途等
研 究 の 部	松山 紘之	40万円 千葉県 北海道	里山の管理放棄は人獣共通感染症リスクの脅威となるのか？ 近年、荒廃する里地里山は耕作放棄地や管理放棄林の増加を介して生物多様性の劣化や人間への獣害を及ぼしている。一方、里地里山の荒廃が人獣共通感染症リスクへ及ぼす影響は明らかではない。海外では、自然環境の改変(e.g.森林の断片化)が人獣共通感染症へ及ぼす影響について研究事例が豊富であるが、里地里山のような二次的自然との関係性に着目した研究事例は乏しい。 そこで、本研究では人獣共通感染症の1種であるマダニ媒介性感染症に着目し、里山の管理放棄がマダニ類へ及ぼす影響を明らかにすることで、「人獣共通感染症の感染リスク低減対策」と「自然環境の保全」を両立した生態系管理の策定に資することを目的とした。
	中田 政司	27万円 鳥取県～ 福井県の 海岸	ワカサハマギク個体群の40年後の追跡調査 ワカサハマギクは鳥取県から福井県にかけての日本海岸と琵琶湖東部の石灰岩地に生育する日本固有のキク属四倍体種である。申請者は1977-1979年に、種分化の実態を調べる目的で、海岸の分布域全体をカバーする59の個体群で染色体数や外部形態の調査を行った。その後、本種が絶滅危惧種に指定されたことから、20年後、30年後に同じ個体群に対して追跡調査を行い、個体群の増減や園芸菊との交雑の有無などを調べ、結果を発表してきた。このような長期追跡調査は他に例がないと思われることから、継続して調査する事が重要であると考え。本研究は約40年後の2020年に追跡調査を行うことを目的とする。
	佐々木 謙昌	50万円 岐阜県 滋賀県	身近なランであるネジバナの多型維持機構の解明による生物多様性維持へのアプローチ ネジバナは、身近な場所で普通に見られるラン科の植物である。本種はらせん状に花をつけ、右巻きと左巻きの株があり、それらはほぼ1:1の比率で見られる。進化生物学的観点から、そのような異なる形質(多型)が種内に維持されるには、何らかの仕組みが必要である。それがわかれば、多様性維持のヒントを得られると考えた。 本研究の目的は、ネジバナの多型維持のメカニズムを理解し、生物多様性維持のヒントを得ることである。そこから、新たな保全策を提案することを旨とする。また、身近で普通な植物を扱った基礎研究からも生物種保護の方法論を得られることを示すとともに、その様な珍しい種を研究する利点と重要性を訴えたい。
	西野 大輝	40.5万円 滋賀県	タナゴ類の排他的分布を解明する タナゴ類は、河川・湖沼・水路などに分布する代表的な淡水魚である。タナゴ類はイシガイ科の淡水二枚貝に産卵するという特殊な繁殖特性を持ち、卵期の生存率が高いことで知られる。しかし卵期の生存率が高いにもかかわらず、近年、減少が著しい。減少の理由はほとんど解明されていない。昨年行った予備調査の結果、琵琶湖周辺の水路では、カネヒラ、アブラボテ、ヤリタナゴの3種が排他的に分布すること、そしてこれらのタナゴ類は非繁殖期にも、“貝の覗き込み行動”という排他的な繁殖行動を行うことが示唆された。 本研究では、この3種のタナゴ類が行う“貝の覗き込み行動”が、3種の排他的な分布をもたらすという仮説を検証する。
	木本 裕也	50万円 京都府	京都府亀岡市におけるトノサマガエル属の保全生態学的研究 日本列島では、トノサマガエルの分布域の一部に、同属で絶滅危惧種のナゴヤダルマガエルが分布している。両種間には繁殖干渉(配偶をめぐる負の相互作用)があることが滋賀県での調査で示唆されている(寺澤修論2018)。しかし、オスの分布については鳴き声で確認できたが、メスは鳴かないので、配偶時間帯である夜間にメスがどの場所に分布するかはまったく分からなかった。そのため、野外における繁殖干渉の実態は不明だった。本研究では、電子ダグをカエルに装着することで、両種のオス・メス間の繁殖干渉の実態を野外で明らかにし、両種の保全を図ることを研究の目的とする。
	児玉 知理	50万円 秋田県	ニホンマムシの場所利用パターンとそれを引き起こす餌資源要因の解明 有毒のヘビ類は、重篤な咬傷被害をもたらすため、捕殺されやすい。しかし、彼らは生態系中で影響力の強い上位捕食者である。従って、生態系や自然環境保全の観点からは、彼らの生態を詳細に解明し、人間側からの不慮の遭遇を避けることで、共存の道を探るべきである。実際、欧米諸国では毒蛇の自然史研究が進み、重篤な咬傷を起こす種でも法的保護の対象となっている。一方、日本では未だ野外生態の知見が乏しく、毒蛇の捕殺が続いている。 本研究は、日本本土に広く分布する有毒種ニホンマムシの生態を詳細に調査することで、彼らと人間との共存の礎となる知見を提供し、ひいては我が国の生態系・自然環境保全に寄与することを目的とする。
	助 成 総 額	515.9万円	